

セクシュアル・マイノリティのアイデンティティは 嫌悪感と揺らぎを経て形成されるのか

：当事者の語りの質的分析

鈴木 彩音 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

石丸 径一郎 お茶の水女子大学 基幹研究院

要約

Cass によるゲイ・アイデンティティ発達モデルに代表されるように、セクシュアル・マイノリティのアイデンティティは自身への嫌悪感や揺れ動きの時期を経て確立され则认为られている。本研究では、そのような「モデルコース」とは異なったアイデンティティ形成が存在するかどうかを、当事者の語りを通して明らかにすることを目的とし、7名のセクシュアル・マイノリティ当事者にメールによるヒアリング調査を行った。その結果、「モデルコース」に加えてさらに3つの異なるパターンが見られた。また、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析の結果、10のカテゴリーが生成され、中でも【自身の“セクシュアリティ”に対するポジティブな認識】カテゴリーに含まれるラベルの語りが少なくなかった。これらのことから、セクシュアル・マイノリティのアイデンティティ形成プロセスは必ずしも嫌悪感や揺れ動きの時期を経るとはいえないことが明らかになった。今日ではいわゆる“LGBTの人々の心理支援の必要性”が広く認識され始めているが、支援という視点のみに偏ることの問題が示唆された。

キー・ワード：性的マイノリティ、アイデンティティ形成、グラウンデッド・セオリー・アプローチ

I 問題と目的

1. セクシュアル・マイノリティをめぐる動き

1) セクシュアル・マイノリティとは

性のあり方は①身体（生物学的性, sex）、②性自認（自己の性に対する認識）、③性的指向（性的魅力、関心等を感じる性）から成る（二宮, 2017）。まず、身体の性は、染色体や性腺などによって特徴づけられ、XY 染色体、男性生殖器、男性ホルモンの組み合わせから成る男性型と、XX 染色体、

女性生殖器、女性ホルモンの組み合わせから成る女性型がある。染色体、生殖器、性ホルモンの分泌などが典型とされる男性・女性とは少し違った身体の発達のプロセスをたどることもあり、こうした場合をインターセックスあるいは性分化疾患という。性自認は、性同一性または心の性ともいい、身体の性と性自認が一致する人をシスジェンダーという。一方、身体的特徴をもとに出生時に割り当てられた性別と性自認とが一致しない場合をトランスジェンダーという。身体の性が男性で性自認が女性の場合を「MTF¹⁾」と呼び、身体の

性が女性で性自認が男性の場合を「FTM²⁾」と呼ぶ。そして、性的指向には、異性愛（ヘテロセクシュアル）、同性愛（レズビアン、ゲイ）、両性愛（バイセクシュアル）、無性愛（アセクシュアル：他の人に対する性的な関心がない人）などがある。

セクシュアル・マイノリティとは、身体的性別、性自認、性的指向などが、男女二元論と異性愛主義社会の「常識」に対応しない者のことである（上野，2008：73）。言い換えれば、セクシュアリティという場面で少数派の人たちのことをまとめてあらわす言い方（LGBT 支援法律家ネットワーク出版プロジェクト編，2016）であり、身体的性別と性自認との関係が不一致ないし違和感がある人、性的指向が異性愛でない人は人口割合的に少数者であるため、「セクシュアル・マイノリティ＝性的少数者」と呼ばれている（東京弁護士会編，2016）。LGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）という言葉も最近ではよく用いられているが、これには無性愛、クエスチョニング（性自認や性的指向を確定しない人や確定できない人）、X ジェンダー（性自認が男女二分になじまない人）などが含まれず、そういった人々を排除することにつながりかねない（二宮，2017：3-4）。そのため、本論文においてはLGBTではなくセクシュアル・マイノリティという語を用いる。

約7万人を対象とした2015年の電通ダイバーシティ・ラボの調査によると、日本における当事者の割合は7.6%（LGB：3.1%，トランスジェンダー：0.7%，その他：3.8%）であった。20歳から59歳までの約9万人を対象とした2016年の博報堂 DY グループ LGBT 総合研究所によると8.0%（LGB：5.3%，トランスジェンダー：0.5%，アセクシュアル：0.7%，その他：1.4%）であり、20歳から59歳までの就労者1000人（男女500人ずつ）を対象とした2016年の連合総合男女平等局によると8.0%（LGB：3.1%，トランスジェンダー：1.8%，アセクシュアル：2.6%，その他：

0.5%）であった。

2) 先行研究における同性愛アイデンティティの発達過程

セクシュアル・マイノリティに関する研究では同性愛に関するアイデンティティ研究が最も進んでおり（石丸，2001）、Cass（1979）はゲイ・アイデンティティの形成について6段階モデルを提案している。6段階モデルの第1段階は「アイデンティティの混乱」であり、自身の行動や感情などが同性愛とよばれるものかもしれないという認識を抱き始め、それまでの自己概念が壊れ、混乱する。第2段階は「アイデンティティの比較検討」である。同性愛者かもしれないという可能性を受け入れ始めるが、周囲との違いが明白になり疎外感を覚え、自身がどこにも属していないように感じる。第3段階は「アイデンティティの寛容」であり、これは20歳ごろだと言われている。同性愛者としての自己像を許容し始め、他の同性愛者との接触を試みる。公には異性愛者としての生活が続けるため、自己像が分断されているように感じる。第4段階は「アイデンティティの受容」であり、同性愛者との交流や交友関係が増え、同性愛に肯定的になり始める時期である。身近な異性愛者にカミングアウトも始める。問題なく過ごせればアイデンティティ形成のプロセスは終了である。第5段階は「アイデンティティの尊厳」であり、同性愛者としてのアイデンティティに誇りを抱くようになる。同性愛者に抑圧的である社会や、偏見や無知に憤りを感じ、異性愛者を敵対視するようになる。最終段階である第6段階は「アイデンティティの統合」である。同性愛は良いものであり異性愛は悪いものと考えるべきではないことに気付き、同性愛者であるという要素は人の全体を形作る構成要素の一つにすぎないと理解する。生活の中で隠すことも宣伝する必要もないと感じるようになる。このようにCassはゲイ・アイデンティティの形成について論じており、実際には第6段階まで到達するケースはまれであり、第1

段階および第2段階で停滞するケースも多々あると考えられることも述べている。

男性同性愛者アイデンティティだけでなく、男女の同性愛者アイデンティティモデルについてもCass (1984) は言及している。女性同性愛者であるレズビアンについてもゲイ・アイデンティティと同様の6段階を提案している (1984)。

また、Troiden (1989) も同性愛アイデンティティ発達モデルを4段階で説明している。Troiden (1989) によれば、主に思春期以前の時期に、同性愛者が自己の同性愛性を自覚する以前の段階である「鋭敏化」から同性愛アイデンティティ発達モデルが始まるとされ、そこから自分の感情や行動が同性愛的であると混乱する「アイデンティティの混乱」の段階、自己をとりあえず同性愛者と定義し他の同性愛者との関わりを持ち始める「アイデンティティの受容」の段階を経て、同性愛を人生の在り方として採用する「コミットメント」の段階に到達するという。以上のことを踏まえ、石丸 (2003) は多くの同性愛者のアイデンティティ発達モデルについて、①同性愛に対して嫌悪感を持つ時期、②同性愛と異性愛のどちらに価値を置くか混乱し揺れ動く時期を経て、③同性愛、異性愛ともに安定した価値づけができ、同性愛が自己に統合された時期を迎えるということを提案している。

3) 社会の変化・先行研究を踏まえての本研究における問い

現代の社会はグローバル化が進み、多様性への取り組みは必要不可欠となっている。数年前まではほぼ知られていなかった LGBT という言葉の認知も国内で急速に拡がり、性的指向および性自認に関して国内の意識が高まっているといえる。開催地に LGBT の保護が求められることになったオリンピック・パラリンピックの東京での開催も大きな要因と考えられるだろう。セクシュアル・マイノリティをめぐる大きな社会変動の一つに一つに同性婚があり、2015年にはアメリカにお

いて同性婚が認められ、2018年現在、世界の191カ国のうち24カ国で同性婚が合法化されている。日本では、2015年より同性パートナーシップ制度が一部の地方自治体で認められている。国内外のこのような動きを踏まえると、日本のセクシュアル・マイノリティの人口割合とされている約8.0%という数字を見ても、アイデンティティの多様性に関する理解を無視することはできないであろう。

そこで本研究では、現在の社会情勢も鑑み、セクシュアル・マイノリティのアイデンティティは必ずしも先行研究におけるモデルコースのように発達しえないのではないだろうかという仮説のもと、セクシュアル・マイノリティ当事者によってそのアイデンティティの発達はどうに語られるのかという問いを立て、ナラティブ・アプローチとグラウンデッド・セオリー・アプローチの視点からアイデンティティの多様性を明らかにする。

II 方法

1. 方法の選択

本研究の目的は、セクシュアル・マイノリティ当事者によってそのアイデンティティの形成はどうに語られるのかを探索することである。アイデンティティの多様性を明らかにすることを目的とするため個別的な意味を扱うことが可能である質的研究が適切であると考えた。

2. 手続き

1) 研究参加者

セクシュアル・マイノリティ当事者、非当事者が所属する自助グループの協力を得て実施した。今回協力を得られたのは7名 (平均30.3歳) であった。その属性を表1に示す。なお、記載されている年齢は調査当時のものである。

表1. 研究参加者

ID	年齢	性的なあり方
A	31 歳	ゲイ男性
B	21 歳	バイセクシュアル女性
C	21 歳	トランスジェンダー（割り当てられた性：女性，性自認：ほぼ男性）
D	46 歳	MtF のレズビアン女性
E	40 歳	クエスチョニング（割り当てられた性：女性）
F	22 歳	バイセクシュアル両性（割り当てられた性：女性）
G	31 歳	パンセクシュアル女性

2) 調査方法

調査として、メールによるヒアリング調査を行った。回答は自由記述方式であり、回答する際の名前は無記名もしくはハンドルネームでも可とした。回答に要する時間は個人の自由とし、質問項目は以下に示した8つであった。

- ① 自身の性自認について、持ち始めた時期とそのきっかけ
- ② 性自認に気づいてからどのようにそれと向き合った（ている）か
- ③ 自身の性指向
- ④ 自身の性指向に気づいた時期とそのきっかけ
- ⑤ 自身の性自認および性指向についてどう考えているか
- ⑥ 性に関することへの悩みの有無と、それを周囲に相談したか
- ⑦ 周囲へのカミングアウトおよび周囲の反応と、それに対してどう感じたか
- ⑧ 自身以外のセクシュアル・マイノリティ（別カテゴリの当事者も含む）の方との交流の有無

Ⅲ 結果

1. ナラティブ・アプローチの視点から

調査の結果、セクシュアル・マイノリティ当事者の語りからアイデンティティ形成のコースを4つのパターンに分類することができた。まず1つ目は、先行研究における「モデルコース説」に近いアイデンティティの語りで、今回の調査では1名が該当していた。2つ目は、嫌悪感の時期があまりなく揺れ動く時期を経て安定するアイデンティティの語りで、今回最も多い3名が該当していた。3つ目は、大きな混乱はなく安定するアイデンティティの語りで、2名が該当していた。そして4つ目は、揺れ動いている最中のアイデンティティの語りで、1名が該当していた。

2. グラウンデッド・セオリー・アプローチの視点から

グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析の結果、10のカテゴリーと33のラベルが生成された（表2）。

ラベル＜性自認と割り当てられた性が一致＞＜割り当てられた性に対する不満＞＜割り当てられた性とは異なる性への目覚め＞から【性自認と割り当てられた性との関係】カテゴリー、＜性指向に対する抵抗のなさ＞＜性指向の気付きから確信への変化＞＜同性愛者に対する偏見＞＜“セクシュアリティ”について考えた経験＞から【自身の性指向との向き合い】カテゴリー

表2. 生成されたカテゴリー

カテゴリー名	ラベル名
性自認と割り当てられた性との関係	性自認と割り当てられた性が一致 割り当てられた性に対する不満 割り当てられた性とは異なる性への目覚め
自身の性指向との向き合い	性指向に対する抵抗のなさ 性指向の気づきから確信への変化 同性愛者に対する偏見 “セクシュアリティ”について考えた経験
自身の“セクシュアリティ”に関する悩み	悩みの多さ 悩みの大きさ 性行為に対する嫌悪感 カミングアウトできない状況 “セクシュアリティ”に対する葛藤 将来への不安
カミングアウトの相手	親 親以外の家族（親戚も含む） 家族以外
カミングアウトすることへのためらい	相手に受け入れてもらえる自信のなさ 相手を選ぶ基準
カミングアウト後の相手の動き	相手の受け入れ度合い カミングアウト後の相手との関係性
相手の反応に対する感情	家族から受け入れてもらえない傷つき 相手の間接的な否定的態度による傷つき 受け入れてくれたことへの感謝
セクシュアル・マイノリティ当事者との交流	交流の有無 交流することへの積極性 交流する理由
自身の“セクシュアリティ”に対するポジティブな認識	“セクシュアリティ”を特定することへのこだわりの強さ 性別へのこだわりのなさ “セクシュアリティ”の受容
世間に対する意識	周囲への不安 世間への反発 異性愛主義とは異なる恋愛の考え方 周囲が扱う性に従う気持ち

一、＜悩みの多さ＞＜悩みの大きさ＞＜性行為に対する嫌悪感＞＜カミングアウトできない状況＞＜“セクシュアリティ”に対する葛藤＞＜将来への不安＞から【自身のセクシュアリティに関する悩み】カテゴリー、＜親＞＜親以外の家族（親戚も含む）＞＜家族以外＞から【カミングアウトの相手】カテゴリー、＜相手に受け入れてもらえる自信のなさ＞＜相手を選ぶ基準＞から【カミングアウトすることへのためらい】カテゴリー、＜相手の受け入れ度合い＞＜カミングアウト後の相手との関係性＞から【カミングアウト後の相手の動き】カテゴリー、＜家族から受け入れてもらえない傷つき＞＜相手の間接的な否定的態度による傷つき＞＜受け入れてくれたことへの感謝＞から【相手の反応に対する感情】カテゴリー、＜交流の有無＞＜交流することへの積極性＞＜交流する理由＞から【セクシュアル・マイノリティ当事者との交流】カテゴリー、＜“セクシュアリティ”を特定することへのこだわりの強さ＞＜性別へのこだわりのなさ＞＜“セクシュアリティ”の受容＞から【自身の“セクシュアリティ”に対するポジティブな認識】カテゴリー、＜周囲への不安＞＜世間への反発＞＜異性愛主義とは異なる恋愛の考え方＞＜周囲が扱う性に従う気持ち＞から【世間に対する意識】カテゴリーが生成された。

IV 考察

1. パターンごとの考察

調査の結果、先行研究における「モデルコース説」に近いアイデンティティの語り、嫌悪感の時期があまりなく揺れ動く時期を経て安定するアイデンティティの語り、大きな混乱はなく安定するアイデンティティの語り、揺れ動いている最中のアイデンティティの語りの4つのパターンが分類された。

1) 先行研究における「モデルコース説」に近いアイデンティティの語り

先行研究においては、「①同性愛に嫌悪する時期→②同性愛と異性愛の間で混乱する時期→③同性愛が自己に統合される時期」という過程が多く、同性愛者のアイデンティティ形成モデルであると述べられていた。この「モデルコース説」に近いアイデンティティの語りが見られたのはCさん1名であった。

Cさんの場合は性自認の観点から見れば割り当てられた性が女性である人に恋愛感情を抱くことに悩む必要はないようにも思われるが、割り当てられた性が同性であるシスジェンダー女性の友人に恋愛感情を抱いていることに「罪悪感でいっぱい」になってしまう。このことから、Cさんは、性的指向について嫌悪していることが考えられる。

Cさんは、中学生の時期に性自認との向き合い方について「葛藤」する。これは、割り当てられた性は女性であるが性自認がほぼ男性であるという自身の“セクシュアリティ”についてCさんが混乱していると読み取ることができる。性的指向のみならず、性自認についても混乱しているといえよう。

Cさんは長い間「自分が何者であるか」ということを考えてきたが、考えること自体にも疲弊し、「吹っ切れた」という。Cさんの中で「吹っ切れた」ものは、自身の性自認はほぼ男性であるが「どうやっても自分のからだは男性ではなく女性である」という「運命」であり、もう抗うことはせず自身を受け入れようと決心するのである。この決心が「いっそのことこの体で人生やり切ってやる」という部分に表れており、これは自己の中にアイデンティティを統合できたことになると考えられる。

2) 嫌悪感の時期はあまりなく、揺れ動く時期を経て安定するアイデンティティの語り

次に、嫌悪感の時期があまりなく揺れ動く時期を経て安定するコースについて考察する。このよ

うなアイデンティティの語りが見られたのはBさん、Dさん、Eさんの3名であり、今回の調査では該当人数が最も多かった。

3名の語りでは、性自認とどのように向き合ったかという質問に対し、「あまり悩まずにきた」「性自認が自分の体と違うワケではないので、特に向き合うとかを考えたことはない」など、嫌悪感は語られておらず、嫌悪する時期が短いと考えられる。

しかし、自身のセクシュアリティについては混乱し揺れ動く様が語られている。Eさんは20歳頃までは自身のセクシュアリティについて深く考えることはなく、セクシュアル・マジョリティに属すると思っていた。だがレズビアン女性との交際や、「性同一性障害の方とお付き合いする中で、セクシュアリティについて考えることが多く」なった。これらの語りから、Eさんは交際相手のセクシュアリティをきっかけに、自身のセクシュアリティと向き合うことになり、自身が「パンセクシュアル、またクィア³⁾」なのだろうかと様々なセクシュアリティの中で揺れ動いている。その後、Eさんの辿り着いた結論は「今はクエスチョニングでもいいのかな」だという。その結論はある意味「境地」としてEさんの中に位置付けられている。

3) 大きな混乱はなく安定するアイデンティティの語り

次に、大きな混乱はなく安定するアイデンティティのコースについて考察する。このようなアイデンティティの語りが見られたのはAさん、Gさんの2名であった。

2名の語りは、セクシュアリティに関する悩みは「特になかった」、性自認について「違和感がなかった」など、最初から自身の“セクシュアリティ”について混乱や葛藤はなく、アイデンティティが安定しているという点で共通している。

Aさんの「自分は、自分。人は、人」という語りから、Aさんは先行研究で述べられているよう

に同性愛者であるという要素は人を形作る構成要素の一つにすぎないと理解していると考えられる。生活の中で隠す必要もなく、「自分らしく生きていく」というAさんの語りから、アイデンティティがAさんの中で統合されていることが読み取れる。

また、Gさんの場合は「そもそも同性が好き、というスタートではなかった」のであり、混乱の過程は経ていないことが窺える。

4) 揺れ動いている最中のアイデンティティの語り

最後に、揺れ動いている最中のアイデンティティのコースについて考察する。揺れ動いている、とは本研究においてはクエスチョニングとほぼ同義であると定義する。クエスチョニングとは、性的指向や性自認を含めたセクシュアリティが「わからない」、「探している途中」、あるいは「分類されたくない」といった人が、自らのセクシュアリティを表現する際に使うことがある言葉である（LGBT 支援法律家ネットワーク出版プロジェクト編、2016）。このようなアイデンティティの語りが見られたのはFさん1名であった。

Fさんは小学生・中学生の頃はセクシュアリティのことについて考えるきっかけはなく、自身のことを異性愛者だと認識していたが、高校生の時に女性に「恋愛感情に近いもの」を抱いたことで、自身が同性も恋愛対象に入るということを知る。この時に自身がバイセクシュアルであることに対する混乱は語られていない。だが、Fさんは、同性である女性を好きになるのであれば男性に生まれたかったと考え、自分が男性ではなく女性である以上は、異性愛者として男性だけが恋愛対象に入るのであれば楽であったと考えている。しかし、同性と交際すること自体や同性を好きになる自身に対する嫌悪はFさんの語りからは見られない。以上のことから、Fさんが先行研究における嫌悪や混乱の時期は経ていないと考えることができる。

さらに、Fさんは、「正直今も中間を漂っている」という感覚を語っている。このような語りは他の

6名の当事者には見られなかった。Fさんは「(男女) どちらでもないけど(男女) どちらでもあるような」状態であり、男性あるいは女性という性別で自身を捉えられることはおそらく望んでいないはずである。それが「私は人間でありたいんだな、って感じ」という部分に表れているといえよう。これらのことから、Fさんはセクシュアリティで分類されたくないあるいは分類したくないとするクエスチョニングであると考えられる。

2. カテゴリーごとの考察

グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析の結果、【性自認と割り当てられた性との関係】【自身の性指向との向き合い】【自身の“セクシュアリティ”に関する悩み】【カミングアウトの相手】【カミングアウトすることへのためらい】【カミングアウト後の相手の動き】【相手の反応に対する感情】【セクシュアル・マイノリティ当事者との交流】【自身の“セクシュアリティ”に対するポジティブな認識】【世間に対する意識】の10のカテゴリーが生成された。

1) 【性自認と割り当てられた性との関係】 カテゴリー

ラベル<性自認と割り当てられた性が一致><割り当てられた性に対する不満><割り当てられた性とは異なる性への目覚め>から【性自認と割り当てられた性との関係】カテゴリーが生成された。

<性自認と割り当てられた性が一致>で性自認と割り当てられた性の間に大きなズレを感じていない当事者の場合でも、<割り当てられた性に対する不満>を抱いている語りが見られた。このことから、性自認と割り当てられた性が一致するからといって必ずしも割り当てられた性に対する不満がないというわけではないことが読み取れた。

また、今回のデータでは<割り当てられた性とは異なる性への目覚め>がはっきりと強い語りが

複数見られた。その当事者には<割り当てられた性に対する不満>というよりは、割り当てられた性に対する葛藤や異なる性になりたいという強い思いが見て取れた。

2) 【自身の性指向との向き合い】 カテゴリー

ラベル<性指向に対する抵抗のなさ><性指向の気づきから確信への変化><同性愛者に対する偏見><“セクシュアリティ”について考えた経験>から【自身の性指向との向き合い】カテゴリーが生成された。

「異性愛が前提である」という考え方は今回のどの当事者の語りからも読み取られ、異性愛以外の性指向を持つ者は、性指向の“気づき”と“確信”の2つの段階があった。この<性指向の気づきから確信への変化>の段階において、自身が抱えている<同性愛者に対する偏見>が影響する様子が窺えた。

<“セクシュアリティ”について考えた経験>の内容は、自身の性指向について様々な経験を経て性指向と向き合い考えている語りと、「自分は何者であるのか」という語りが見られた。

3) 【自身の“セクシュアリティ”に関する悩み】 カテゴリー

ラベル<悩みの多さ><悩みの大きさ><性行為に対する嫌悪感><カミングアウトできない状況><“セクシュアリティ”に対する葛藤><将来への不安>から【自身のセクシュアリティに関する悩み】カテゴリーが生成された。

悩みの内容、<悩みの多さ><悩みの大きさ>は多種多様であり、“セクシュアリティ”が同じ当事者であっても異なっていた。また、今回の調査協力者7名のうち6名が悩み有と答えていた。このことから、“セクシュアリティ”のありようにかかわらず多くの当事者が多かれ少なかれ悩みを有している可能性が示唆された。

4) 【カミングアウトの相手】 カテゴリー

ラベル<親><親以外の家族(親戚も含む)><家族以外>から【カミングアウトの相手】カテ

ゴリーが生成された。

今回の調査では7名全員が誰かしらにカミングアウトしているという結果であった。【カミングアウトの相手】として、＜親＞を想定していたのが6名で最も多く、次いで＜家族以外＞が5名、＜親以外の家族(親戚も含む)＞が3名であった。

【カミングアウトの相手】カテゴリーにおいて興味深いのは、質問項目には「周囲へのカミングアウト」とカミングアウトをする相手は特定していないにもかかわらず、6名が親に対するカミングアウトを語っていた点である。このことから、当事者の人々にとって「カミングアウトの相手＝親」はいわば当たり前の概念であり、言わずもがなとして当事者の根底にあるということが推察される。親へのカミングアウトに関する先行研究はいくつかなされており、あくまでも調査者側の視点で親へのカミングアウトが重要と捉えているが、本研究では被験者である当事者自身の中でも親へのカミングアウトを重要視しているという知見が示唆された。

5) 【カミングアウトすることへのためらい】カテゴリー

ラベル＜相手に受け入れてもらえる自信のなさ＞＜相手を選ぶ基準＞から【カミングアウトすることへの不安】カテゴリーが生成された。

今回の調査では自身のカミングアウトを相手に受け入れてもらえる自信があった人は0名であり、＜相手に受け入れてもらえる自信のなさ＞が【カミングアウトすることへのためらい】に直結していると考えられる。

＜相手を選ぶ基準＞としては、「“セクシュアリティ”のことに理解がありそうな人」「LGBTに興味がある人」などが挙げられており、普段の会話や態度から相手をよく観察し、相手を選ぶ際には慎重になっている様子が語られた。

6) 【カミングアウト後の相手の動き】カテゴリー

ラベル＜相手の受け入れ度合い＞＜カミングア

ウト後の相手との関係性＞から【カミングアウト後の相手の動き】カテゴリーが生成された。

＜相手の受け入れ度合い＞は低・中・高の3段階であり、明確に段階分けをすることが難しい反応もあったが、受け入れが低い語りが最も多く、受け入れが中程度と高い語りはそれぞれ同じくらいであった。受け入れが低い反応では、「お前は男にはなれない」(拒否)、「(面倒にならないために)そのままの(性別移行しない)ほうがいい」、「セクシュアリティについて話すのを嫌がる」、「男性も好きになれるのなら、男性と付き合って家庭を作ってよ」などが見られた。受け入れが中程度の反応では、「驚きはあったが反対や偏見などはなかった」、「話してくれてありがとう」などが見られた。受け入れが高い反応では、「人間が人間を好きになれるって素敵なことだよ」「へえ！いいんじゃない」などが見られた。

＜相手の受け入れ度合い＞は＜カミングアウト後の相手との関係性＞に結び付いており、受け入れ度合いが高い場合は良好な関係に繋がり、「以前と変わらない接し方をしてくれる」という語りや、「このこと(カミングアウト)がきっかけで仲が深まったように感じた」といった語りが見られた。一方で、受け入れが低い場合は相手との喧嘩などにつながり、以前までの関係性が悪化してしまう可能性も見られた。

7) 【相手の反応に対する感情】カテゴリー

ラベル＜家族から受け入れてもらえない傷つき＞＜相手の間接的な否定的態度による傷つき＞＜受け入れてくれたことへの感謝＞から【相手の反応に対する感情】カテゴリーが生成された。

【カミングアウト後の相手の動き】カテゴリー内の＜相手の受け入れ度合い＞により、＜受け入れてもらえない傷つき＞の有無、傷つきの程度は異なっていた。＜相手の受け入れ度合い＞が低ければ＜受け入れてもらえない傷つき＞の度合いも高く、家族から受け入れてもらえず「とても傷つき、悲しかった」「内心かなり傷ついた」「寂しい

思いをした」といった語りが見られた。荘島(2010)は、家族がカミングアウトを受け入れることは困難とし、当事者に否定的な体験をもたらす場合もあると述べており、＜家族から受け入れてもらえない傷つき＞はまさに当事者にとって否定的な経験であるといえるだろう。また、(カミングアウト後の相手の拒否的な態度による傷つきだけでなく、)カミングアウトをする前に相手から当事者に対する否定的な発言や態度から間接的な傷つきを受ける場合の語りも見られ、これらの語りを＜相手の間接的な否定的態度による傷つき＞とした。

一方で、＜相手の受け入れ度合い＞が高い場合には、傷つきとは大きく異なる＜受け入れてくれたことへの感謝＞の語りが見られた。

8) 【セクシュアル・マイノリティ当事者との交流】 カテゴリー

ラベル＜交流の有無＞＜交流することへの積極性＞＜交流する理由＞から【セクシュアル・マイノリティ当事者との交流】 カテゴリーが生成された。

今回の調査協力者全員が同じ当事者との交流を有していた。交流の場は新宿2丁目、当事者団体、インターネットなどであった。＜交流することへの積極性＞には差が見られた。

9) 【自身の“セクシュアリティ”に対するポジティブな認識】 カテゴリー

ラベル＜“セクシュアリティ”を特定することへのこだわりの強さ＞＜性別へのこだわりのなさ＞＜“セクシュアリティ”の受容＞＜“セクシュアリティ”について考えた経験＞から【自身の“セクシュアリティ”に対する認識】 カテゴリーが生成された。

今回の調査では、「セクシュアリティについては特に断定しなくてもいいかな」「自分は〇〇(特定のセクシュアリティ)だと思う」といったように、＜“セクシュアリティ”を特定することへのこだわりの強さ＞が強くはない語りが多く見られた。

＜性別へのこだわりのなさ＞については、「(男女の) 中間を漂っている感覚」「人によって対応を変えている」「男性、女性という枠に縛られないでいたい」といった語りが見られた。これらの語りからは、ふるまう性別を男性と女性のどちらかに絞ることにこだわりは見られないが、同時に、性別が男性か女性の二つという概念である男女二元論の括りからは逸していないことも推察される。

＜“セクシュアリティ”の受容＞が行われているとはすなわちアイデンティティが自身に統合され安定していることである。＜“セクシュアリティ”の受容＞の語りが見られたのはAさん、Cさん、Eさんであり、3名はいずれも「モデルコース説」パターン、嫌悪感の時期はあまりなく揺れ動く時期を経て安定するパターン、大きな混乱はなく安定するパターンに当てはまるため、アイデンティティが統合され＜“セクシュアリティ”の受容＞もされていると考えられる。

10) 【世間に対する意識】 カテゴリー

ラベル＜周囲への不安＞＜世間への反発＞＜異性愛主義とは異なる恋愛の考え方＞＜周囲が扱う性に従う気持ち＞から【世間に対する意識】 カテゴリーが生成された。

「男だから、女だから、この人が好きなのではなく」「誰が誰を好きであろうが好きという気持ちを大事にすればいい」といった＜異性愛主義とは異なる恋愛の考え方＞があるからこそ、「どうして世間は許してくれないのか」という異性愛主義である＜世間への反発＞が生まれていると考えられる。その一方で、「周りの目を気にする」「偏見の目で見られることもあるから公言出来ない」などの＜周囲への不安＞があるために＜周囲が扱う性に従う気持ち＞が生じると読み取れることができた。

3. パターンとカテゴリーをふまえての考察

本研究では、セクシュアル・マイノリティのアイデンティティ形成の過程について4つのパタ

ーンが見られ、先行研究の知見とは一致しなかった。さらに、モデルコースのような形成が見られたのは1名であり、他のコースに該当していた当事者のほうが多かった。また、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析の結果、10のカテゴリーが生成され、中でも【自身の“セクシュアリティ”に対するポジティブな認識】カテゴリーに含まれるラベルの語りが少なくなかったのは大きな発見である。

以上の結果をふまえると、「モデルコース」以外のコースに該当していた当事者が多かったことから、先行研究で示されている普遍的な同性愛アイデンティティ形成のコースのように形成しえないのではないだろうかという仮説は支持されたといえる。さらに、自身の“セクシュアリティ”を受容しアイデンティティが統合されている当事者も少なくないという本研究の結果から、これまで多くの研究でセクシュアル・マイノリティのメンタルヘルスは問題があると言われているが、必ずしもそうではなく、大きな問題なくアイデンティティが発達していく可能性も示唆された。

V 本研究の限界と今後の展望

本研究では、性自認と性指向に分類して調査を行ったが、この二つをどのように整理するかが問題となった。性自認と性指向を合わせてアイデンティティ（もしくはセクシュアリティ）と捉えるのか、性自認と割り当てられた性が一致している場合は性指向のみをアイデンティティとするのか、当事者によっても捉え方が異なり、最初に明確に決めたいので調査協力者に呈示すべきであった。

また、トランスジェンダー当事者の多くは割り当てられた性を変更することでマジョリティに属することを志向していることが考えられる。今回の調査協力者の中でも D さんは性別移行しており、戸籍性別を変更している。このことはつまり、マジョリティに埋没したいということであるため、シスジェンダーとトランスジェンダーは社会規範

上マジョリティであり、X ジェンダーがマイノリティであると位置付けることもできよう。

さらに、本研究の結果から当事者のメンタルヘルスに大きな問題がない可能性や、当事者に対する手厚い支援のみでなく、当事者の自発的な動きや前向きな考え方などポジティブな側面に焦点を当てて十分研究できる可能性が明らかになった。

また、現代の社会においてはインターネットの普及により、当事者は以前よりも同じ当事者の仲間と繋がりやすくなっていることが推測されるが、年代ごとに交流の有無や仕方について調査を行う。そのような場合、例えば20代のSNSを通じた交流が多い傾向が出る可能性がある。当事者同士の交流が当事者のメンタルヘルスにどのような影響をもたらすかが明らかになると期待される。

<注>

- 1) Male To Female の頭文字をとっている。
- 2) Female To Male の頭文字をとっている。

文献

- Cass, V.C. (1979). Homosexual identity formation: A theoretical model. *Journal of Homosexuality*, 4, 219-235.
- LGBT 支援法律家ネットワーク出版プロジェクト編 (2016). 『セクシュアル・マイノリティ Q&A』
- 二宮周平 (2017). 性のあり方の多様性——人ひとりのセクシュアリティが大切にされる社会を目指して 日本評論社
- 石丸径一郎 (2001). マイノリティ・グループ・アイデンティティ——人はいかにして自らに付与された差異を取り扱うか—— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 41, 283-290.
- 石丸径一郎 (2003). レズビアン, ゲイ, バイセクシャルについて 心身医学, 44(8), 590-594.
- 荘島幸子 (2010). 性別の変更を望む我が子からカミングアウトを受けた母親による経験の語り直し 発達心理学研究, 27(1), 83-94.
- 東京弁護士会 性の平等に関する委員会 セクシュアル・マイノリティ プロジェクトチーム編 (2016). セクシュアル・マイノリティの法律相談——LGBTを含む多様な性的指向・性自認の法的問題——, ぎょうせい

Troiden, R.R. (1989) . The formation of homosexual identities. *Journal of homosexuality*, 17, 43-73.

上野淳子 (2008) .心理学における性的マイノリティ研究——教育への視座—— 四天王寺大学紀要, 46, 73-83.